



図1 巨勢寺 塔心礎



図3 瓦窯
(転載許可：奈良県立橿原考古学研究所)



図4 梵鐘鑄造遺構
(転載許可：奈良県立橿原考古学研究所)

昭和2年指定の国史跡巨勢寺塔跡には、極めて精巧な造りで有名な塔心礎(図1)が残っています。ほぼ長方形の花崗岩の中央に深さ13cm、直径89cmの穴が正円に彫られ、その中心には直径13cm、深さ6cmの仏舎利孔があり、(仏舎利=釈迦の骨。実際には水晶や真珠などで代用) 仏舎利

容器を納め、蓋ができるように段彫りになっています。この孔を巡って2重の同心円の溝があり、外周に沿って彫られたやや深い溝と1条の直線の溝でつながりますが、この直線の溝はさらに側面を貫通する孔に通じており、水抜き機能を担っています。機能的かつ美しい造形といえるでしょう。なお、89cmの

直径から五重の塔が建っていたことが分かります。巨勢寺は巨勢氏の氏寺です。1987年から1990年にかけて周辺の発掘調査が実施され、講堂とその左右に伸びる回廊や築地がみつかり、その伽藍配置は左に塔、右に金堂、両者の背後に講堂を配置する法隆寺式(図2)であることが判明しました。また、この調査では階段式登窯の瓦窯(かわらがま)(図3)、梵鐘(釣鐘)を鑄造する施設(図4)などもみつかっています。出土した瓦(図5)などから7世紀中頃の創建で平安時代末には廃寺となることが分かりました。巨勢臣徳太は巨勢寺創建に関わった人物とみられ、大化の改新の端緒となった乙巳の変(645年)に貢献し、4年後には左大臣となります。ただし、巨勢寺の初出文献はそれよりもかなり遅く、『日本書紀』天武天皇の朱鳥元年(686年)に、天皇の



図2 巨勢寺 想定復元図(『巨勢寺』から)



図5 巨勢寺の軒瓦
(転載許可：奈良県立橿原考古学研究所)

病氣平癒の祈願のため食封二百戸を賜ったとあります。その後の巨勢氏ですが、巨勢朝臣奈弓麻呂は天平勝宝元年(749年)に大納言にまで昇り詰めています。このほか中納言、少納言となった人物も多く、例えば巨勢朝臣野足は弘仁3年(812年)には陸奥出羽按察使(交戦目的の場合は征夷大將軍となる)に就き、同時に中納言に昇進しています。

さて、蘇我氏が教科書に登場するほど有名なのは、天皇家をないがしろにする行為を重ねた本宗家の蘇我蝦夷と入鹿が、先述の乙巳の変(645年)で劇的な最期を遂げるからです。一方、巨勢氏は乱の首謀者などにはなることはないため、そのような派手さはありません。しかし、だからこそ巨勢氏は、最大級の横穴式石室、條ウル神古墳を築造するまでに成長した後も没落することなく、続く飛鳥・奈良・平安時代(前期)を通じても高級官僚を輩出する、息の長い名門貴族となった、ということができるでしょう。

【参考文献】『巨勢寺』、2004年、奈良県立橿原考古学研究所

(文責 藤田和尊)

※今回で考古学・古代史編はシリーズとしては完結です。長らくお付き合いいただきありがとうございます。



其の四十八

古墳時代(36)
巨勢(許勢)氏の
台頭(8)

文化財課
☎60-1608